2002年度環境セミナー

チベットの民族と環境

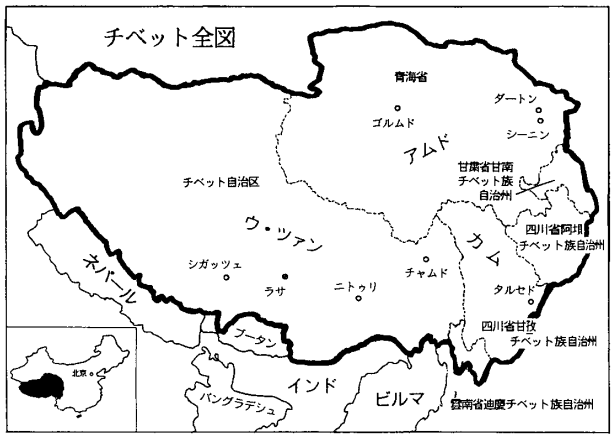
谷地　　隆

1．はじめに

環境情報研究所主催の2002年度環境セミナーは、「チベットの民族と環境」のテマーで10月19日に開催された。本稿は、2002年７月の旅行で得た「秘境チベット見聞録」として講演したものである。

世界のどんな奥地からでもすぐ情報が入り、茶の間でその様子を知ることができる。交通機関も発達し、どんな辺鄙な地域でも数日もあれば行くことが可能となった21世紀の今、真の「秘境」という地域は存在しなくなったであろう。しかし、「秘境」という言葉の響きには、現在の人々が忘れてしまったいにしえの“人間生活”の魅力がある。ここでは、先人が苦難のすえたどり着いた秘境チベットとは大きく変化した現在のチベットを紹介する。

1)チベットの位置－狭義のチベットは、ラサを中心とする中国チベット自治区で、我々が通常“チベット”というときには、この地域を指している。北西のクンルン(崑崙)山脈、北東のチーレン(祁連)山脈、南のヒマラヤ山脈、西のパミール高原、東のユンナン(雲南)高原に挟まれた地域で、



出展：チベット白書(日中出版)

東西約2,000km、南北約1,000km、面積は約120万km²、日本の4.5倍である。広義のチベット、すなわチベット文化圏(旧チベット)は、チベット自治区よりさらに広く、約220万km²である。中国内では、チンハイ(青海)省、カンスー(甘粛)省、スーチョワン(四川)省、ユンナン(雲南)省の一部で、国外では、ネパール北部、インド北西部のラダク、ザンスカール、インド北東部のダージリン、シッキム、ブータンなどが含まれる。

2)チベットの地形－チベット自治区は北はタングラ(唐古拉)、ホフシル(可可西里)、クンルン(崑崙)、西はカラコルムの支脈とヒマラヤ、南はヒマラヤ、東は横断山脈に囲まれ、ほぼ全域がチンツァン(青蔵)高原の一部、すなわらチベット高

原からなりたつ。典型的な山地性高原である。高原の基準面が標高平均4000m以上もあって、高く広大なうえに、高原周辺部の山脈もまた標高6000～8000mもある。チベット高原はまた、隆起高原でもある。第三紀始新世後期から鮮新世までに約1000mの原高原面(新しくできた原地形面)ができ、以後、今日までの200万～300万年の間に急上昇している。高原部は平坦で、河川の開析、侵食もほとんどみられないがこれは高原の隆起の速さに、河川の下刻作用が対応できなかったためと考えらる。チベット高原は、北部、南部、東部山地と、大きく３つの地域に分けられる。北部は砂漠やステップの広がるチャンタン(蔵北・ツァンペイ)高原である。チャンタン高原は、なだらかな波状の高原で、数多くの湖沼が発達し、そのほとんどが塩水湖である。河川は海への出口がなく、内陸河川となっている。ヒマラヤ山脈とヤルツァンポー川に沿った南部地域は、ツァンナン(蔵南)河谷地域である。構造性の大河谷地形で、ヤルツァンポー川の中流域はチベットでも有数の農耕地域だ。この地域はブラマプトラ、サトレジ、インダス、ガンジス川など東南アジア、南アジアへ流れて行く大河の水源地帯となっている。東部は、チョワンツァン(川蔵)峡谷地帯で、チンツァン(青蔵)高原の一部である。スーチョワン(四川)省、ユンナン(雲南)省、ミャンマー、ベトナムなどへ流れて行く峡谷地帯(横断山脈の一部)となっている。

３)チベットの気候－チベット高原の気候は、高山気候、寒帯気候、ステップ気候、砂漠気候などが卓越する。気圧は低く、空気が薄い。日照量が多く、気温の日較差が大きく、日中の最高気温が20℃上になったり、夜間の最低気温が零下まで下がることもめずらしくない。太陽の放射が強く、大気中のCO_2、塵埃などが少ないため、日照時間が長い。この長時間の日照を利用して、各家庭、寺院、ホテルなどでは、湯沸かしに太陽光を利用している。チベットは全国的にも放射量が多

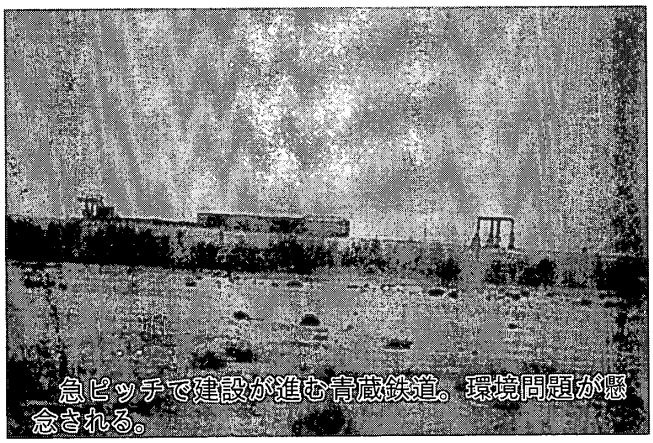
高度 (m)	気圧 (hPa)	空気密度 (g/m³)	酸素量 (g/m³)	沸点 (℃)
7000	420	573	133	77
6000	481	644	149	80
5000	549	719	166	84
4000	624	802	186	87
3000	707	892	206	90
0	1013.2	1292	260	100

い地域である。ラサは、総放射量は195kcal/㎠・年。これは、230～260kgの石炭を燃焼させたときの熱量に匹敵する。同緯度帯に位置するチョンツー(成都)は88kcal/㎠・年。シャンハイ(上海)は113kcal/㎠・年である。チベット高原の日照時間も長く、ラサの年間日照時間は3021時間、チョンツーは1186時間、シャンハイは1932時間である。此れゆえ、ラサは“日光城”と呼ばれている。

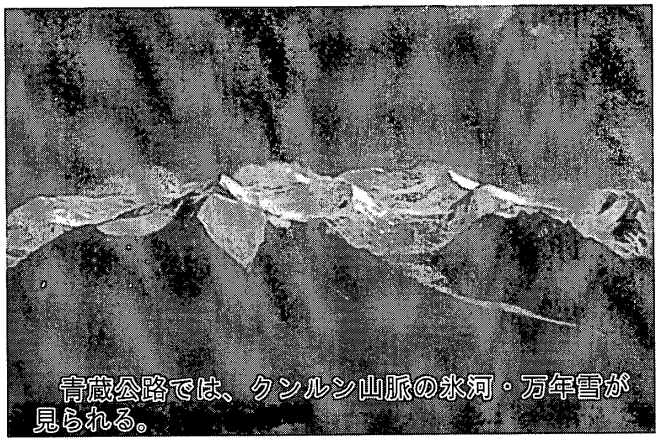
高度・気圧・空気密度・ 酸素量・沸点

３)チベットの動植物－チベットは、人間の干渉を受けていない広大な荒野が数多く残っている。チベットには、おおよそ１万種の高原植物、118種の哺乳類、473種の鳥類、49種の爬虫類、44種の両生類、61種の魚類、2300種余の昆虫が確認されている。厳しい自然環境にもかかわらず、チベットには多くの野生動物が生息している。野ヤク、チベットガゼル、チベット野ロバなどの大型哺乳動物やヒマラヤマーモット、ヒマラヤ鳴きウサギなどの小さな動物たちも多い。数は少ないし

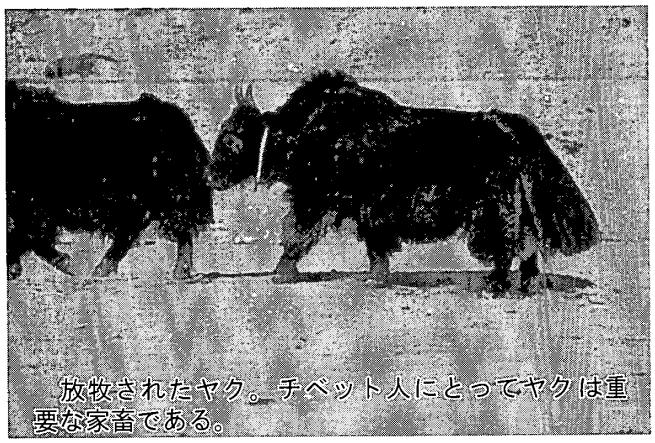
蔵南河谷を東流するヤルツァンポー河。ヒマラヤ山脈を越えると、ブラマプトラ川となりベンガル湾に注ぐ。



急ピッチで建設が進む青蔵鉄道。環境問題が懸念される。



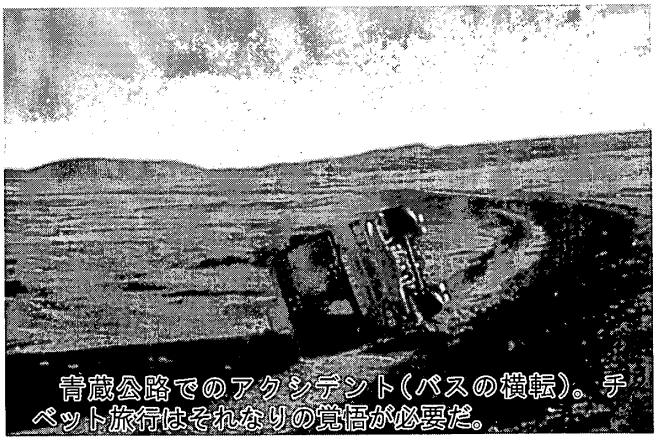
青蔵公路では、クンルン山脈の氷河・万年雪が見られる。



放牧されたヤク。チベット人にとってヤクは重要な家畜である。

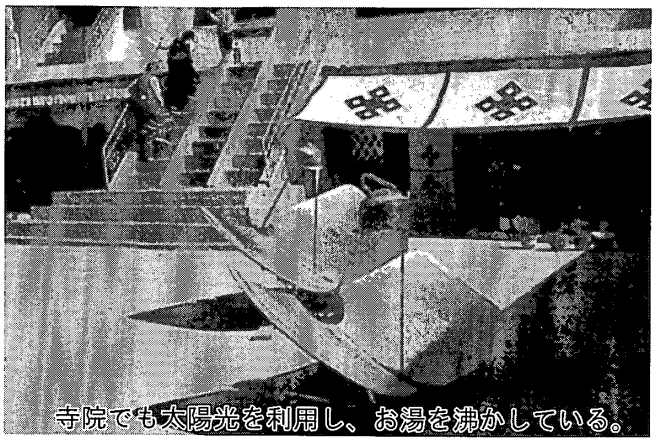
青蔵公路でのエンスト、パンク・エンストは中国では日常茶飯事。

ヤクバターはチベット人にとって重要なカロリー源である。必要に応じて切り売りされる。



青蔵公路でのアクシデント(バスの横転)。チベット旅行はそれなりの覚悟が必要だ。

聖なる都サラの象徴、ポタラ宮。


寺院でも太陽光を利用し、お湯を沸かしている。

ラサ・バルコル(八角街)の市場。バター茶を作るドンモを買い求めるチベット人。

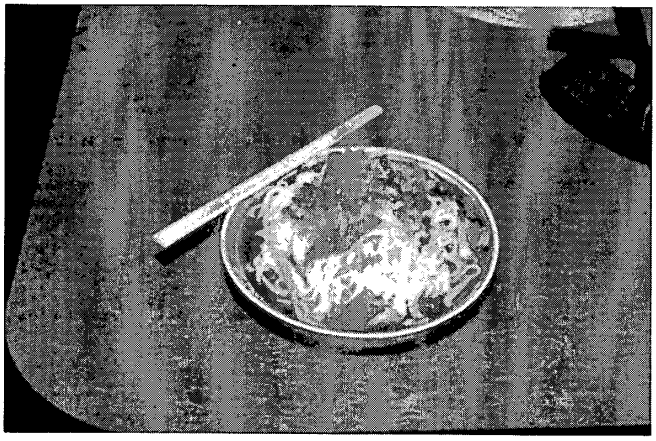
ジョカン(大昭寺)正門前で五体投地をする信者。いつも礼拝者は絶えない。

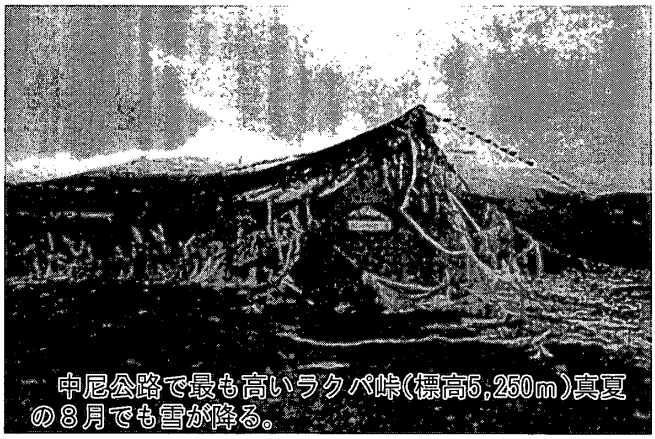
仏具やアクセサリーを売るチベット人夫妻。

問答修行をするセラ寺の僧侶

代表的なチベット料理、モモ(上)とトゥクパ(下)

ラサ市街。住宅の屋根にはタルチョとルンタがはためく。




中尼公路で最も高いラクパ峠(標高5,250m)真夏の8月でも雪が降る。

地域も限定されるが、雪ヒョウ、ヒグマなどの存在も確認されている。チベットの東部には、ジャコウ鹿が多い。この鹿のオスから採れる“じゃこう(麝香)”は、香料や薬品に利用され、珍重されている。標高が低いところには原生林も見られるが、チベットの大部分の地域では樹木は育たない。植物は、高山植物がみられる。とくにヒマラヤン・ブルーポピーの青い花は、標高4000m以上でなければ見られない美しい花だ。最近、話題性の高い冬虫夏草など、高地に育つ薬草類も豊富だ。しかし、最近の森林伐採や野生動物狩猟により、チベットの脆弱な生態系に影響を及ぼしている。

5)チベットの人々－チベット人は、チベット・ビルマ語系に属する民族で、一般的な特徴としては、肌は褐色で、目や髪は黒く、日本人にもよく似ている。チベット人自身は、チベットのことを「プー」(能力があるという意味)と呼んでいる。チベット人は中央アジアからトランス・ヒマラヤ(ヒマラヤ山脈西部)を経てチベット高原に定住したという説が有力である。住民の大半がチベット仏教を信仰している。チベットの人口は、2000年の中国の統計によると、中国内に居住するチベット人は、約460万人。自治区の人口は、263万人。なお、チベット亡命政府情報省の報告によると、現在のチベット人の人口は、中国内に約610万人、外国に12万人とされている。中国内のチベット人の数が、中国と亡命政府の統計で140万人以上も異なっているのは興味深い。外国居住者の内訳は、インド10万人、ネパール5000人、スイス・アメリカ2000人などである。現在チベットに住む中国人は760万人で、チベットに住むチベット人より多い。チベットにおける大量の中国人の流入は、自治区の人口圧力を高めている。

6)チベットの住居－チベットの民家は、二階建てか三階建ての箱型家屋が一般的で、屋根は平らである。家の素材は石と土と木材。床、壁、屋根は土で、骨組や窓枠などに木材が使われている。レンガを積み上げて壁を作くり、レンガとレンガの間に土を突き固めて補強する。壁にしっくいを塗り、その上にきれいに着色しているのが、都市部で見かける民家である。民家にはたいてい中庭があり、それを囲むように家屋がある。間取りは、居間、仏間、台所が基本で、広い家には客間、物置、使用人部屋などがある。一階は物置や家畜のスペースで、台所や居間などの居住部分は二階にある。屋上には男神と女神を祀った祭壇があり、タルチョ(経旗)やルンタ(風の馬)がはためいている。高原の遊牧民はグルと呼ばれるテントに暮らしている。テントはヤクの毛で織られた丈夫な厚手のもの、骨組は木材でできている。チベットのトイレは、二階や三階などの高いところにあることが多い。部屋の床にぽっかり穴があいていて、ここから階下に落とすという仕組である。集合住宅では、10～20家族1トイレという場

合が多い。都市部でも当番制の汲み取りが行われている。チベット人は、一生の間に三度しか入浴しないといわれている。生まれたとき、結婚するとき、天に昇るとき、の三度だけという。これは俗説であるが、たしかにチベットには、頻繁に入浴するという習慣はない。チベットは空気が乾燥しているので、何日も入浴せずにいても、身体がベタつかないから、入浴の必要性が湿潤な低地ほどにはないのである。入浴して垢を落としてしまうと、皮膚が無抵抗になって風邪をひいたりしてしまう。水辺などでは身体を拭った髪を洗ったりしている。

7)チベットの食事－チベット人は、敬虔なチベット仏教徒だが、食に関するタブーはほとんどない。ヤクや羊の肉を好んで食べるが、魚を食べることは少ない。地形的に水域の割合が小さく、漁業に従事する人が少ないからであろう。チベットは、厳しい環境のため、米があまりとれない。大麦の栽培が中心である。煎った大麦を挽いて粉にした「ツァンパ」が主食となっている。日本でいえば「麦こがし」である。粉のままでは食べにくいので、お茶と混ぜて団子状にして食べることが多い。麦の粉からは、ほかにうどんも作る。チベツトのうどんは「トゥクパ」と呼ばれ、肉や野菜と一緒に煮込んで食べる。ギョウザに似た「モモ」も、チベツト料理としてよく知られている。バター、チーズ、ヨーグルトなどの乳製品(ヤクの乳が多い)も、重要な食べ物だ。チベット人の生活に、バター茶(ジャ)は欠くことのできない必需品である。一日に30杯も50杯も飲む。朝食はバター茶だけですませることもある。バター茶は、「ドンモ」と呼ばれる細長い筒に茶葉、バター、を入れて撹拌させて作る。バター茶は、独特の生臭さ(乳臭さ?)あるが、とくに厳しい超高地では、甘いお茶よりバター茶のほうが合っているようだ。お酒－チベット文化圏でも、都市部ならビールやウイスキーなど工場で生産されたお酒が手に入る。地酒は、大麦から造る「チャン」が一般的である。醸造酒の一種で、白濁した乳酸菌飲料のようである。味は酸味があって、口あたりはソフト。アルコール度はビール程度である。「アラック」(ネパールではロキシー)は、透明な蒸留酒、焼酎である。雑穀、米、麦、シャガイモなどから造る。口あたりはスッキリと辛口、アルコール度は40度程度とかなり高い。

8)チベットの衣服－チベット人の民族衣装は、「チュバ」という。女性は「パンデン」という前かけ(エプロン)を身につける。チベット人は、たくさんの装飾品を身につける民族である。髪は三つ編みが一般的で、女性は、「バシェー」というトルコ石やサンゴ玉、古銭などを縫い込んだ三角の布を載せることもある。

9)青蔵鉄道建設に伴う環境への影響

2006年完成予定の青蔵鉄道の建設が急ピッチで進んでいる。青蔵鉄道が完成すると、鉄道のない省・自治区はなくなり、ペキン(北京)－ラサ間は２日間の鉄道の旅が可能となる。投資や観光などチベットの経済発展が期待されている。青蔵鉄道は、チンハイ(青海)省の省都シーニン(西寧)からゴルムド(格爾木)を経て、クンルン(崑崙)山口、タングラ(唐古拉)山口を越え、チベット自治区の区都ラサ間を結ぶ高原鉄道である。海抜4000m以上の地域が960kmあり、タングラ(唐古拉)山口は

5072mに達し、また550kmに及ぶ凍土地帯、216kmの震度マグニチュード9の地震が発生する地域を通過することになっている。沿線一帯は、寒冷かつ酸欠状態での作業、生態環境が脆弱で、地殻活動が頻発する地域でもあるので、敷設工事は予想を越える困難なものとなっている。チベット高原は厳しい環境にあり、脆弱な土地である。この地帯おける鉄道建設に伴う種々の環境への影響が懸念されている。チベット高原の鉄道敷設地域には、凍土地帯、塩湖地帯、自然保護区などがあり、鉄道はこの地域を通過する。開通に際し、上流部の環境悪化が下流へ及ぼす影響などが指摘されている。凍土地帯では、凍結過程で膨張し、橋脚や路盤などの鉄道施設が破壊される恐れや塩湖地域では、雨季の増水により塩湖の塩水が溢れ路盤の侵食及び腐食の問題が発生する恐れがある。自然保護区では、生態系への影響が懸念されている。

10)おわりに

筆者は1997年と2002年にチベット入境を果たしている。今回、ラサに行って見て感じたことは、ハイスピードの「近代化」である。洪水のような中央政府からの資金流入で急速に発展し、多くのチベット人が豊かさを追い求めている。ポタラ宮の周辺には高い建物が建っている。5年前と大分様相が違う。集合アパートも古いチベット様式の建物が取り壊され、漢・蔵折衷の得たいの知れない新しいものが建てられている。店舗などの看板の文字も、チベット文字より漢字を中央に据えて大きくしている。チベット人の民族的宗教的摩擦による反政府感情を経済発展によって押さえ、中央政府による自治区の安定確保を目指しているようだ。(今回のセミナーは、秘境探検家を標榜(自称)する私にとって非常に有り難い企画であった。このような機会を与えてくださった環境情報研究所に、心より御礼申し上げます。)

参考文献

賀中　庄厳(2001)
『西蔵旅行完全手册』(作家出版社)
廖東凡(2001)『漫游西蔵』(西蔵人民出版社)
中国科学院青蔵高原総合科学考察隊(1983)
『西蔵自然地理』(科学出版社)
後藤ふたば(1995)
『行きたい人のチベット入門』(山と渓谷)
中国地理紀行編集部(2002)
『中国地理紀行・チベットへの道』(Asia geo)